

筑波大学

次の問について、400 字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

ミケーネ時代から紀元前 6 世紀までのギリシア本土と地中海におけるギリシア人の都市文化について、以下の語句を用いて説明しなさい。

アゴラ オリンピア 集住(シノイキスモス) 植民市 線文字 B

前 1600 年から前 1200 年頃、アカイア人がミケーネ地方において巨石城塞を築き、線文字 B を用いて粘土板に行政記録を残した。このミケーネ文明の終焉後、数百年の不透明な時代をへて、前 8 世紀にはギリシア各地で王や貴族が主導する集住(シノイキスモス)が始まり、アクロポリスやアゴラを含む城壁都市と周囲の田園地帯からなる 1000 以上もの都市国家[ポリス]が成立した。そこでは主として王族、貴族、成年男子を中心とする政治が行われ、奴隷制が発達した。ポリスの間には抗争が絶えなかったが、共通の言語、文化、宗教を通じて汎ギリシア的連帯が保たれ、前 776 年からは 4 年ごとにゼウス神の聖所であるオリンピアにおいて競技会が催されてポリス間の親睦が図られた。一方、人口増加やポリス間の抗争を受けて、新天地を求めるギリシア人が黒海や地中海各地に進出して多数の植民市を建設し、ギリシア文化の拡大と交易活動を促進した。

筑波大学

次の問について、400 字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

アレクサンドロス大王の東方遠征の経過について、以下の語句を用いて説明しなさい。

アレクサンドリア インダス川 ダレイオス 3 世 バクトリア マケドニア

マケドニア王フィリッポス 2 世は、カイロネイアの戦いでアテネ・テーベ連合軍を破り、コリント同盟のもとにギリシアのポリスを服属させた。フィリッポス 2 世の息子アレクサンドロス大王は、ギリシアに干渉するアケメネス朝ペルシアに向けて、前 334 年にマケドニア・ギリシア連合軍を率いて東方遠征に出発した。大王は、イッソスの戦い、さらにその後のアルベラの戦いでダレイオス 3 世の軍を破った。この結果、前 330 年にアケメネス朝ペルシアは滅亡したが、大王はさらに軍を進め、中央アジアのバクトリアからインダス川流域までも征服した。部下がそれ以上の進軍を望まなかったため大王の軍は引き返したが、短期間にエジプト、メソポタミア、イラン地方を含む大帝国が建設された。大王は帝国各地にギリシア風のアレクサンドリア市を建設したが、中でもエジプトのアレクサンドリア市はプトレマイオス朝の首都として繁栄し、ヘレニズム文化の中心となった。

名古屋大学

前 508 年に、ギリシアのアテネではクレイステネスの改革によって民主政の礎が据えられたが、伝承によれば、ローマでもほぼ同じ頃(伝承では前 509 年)に王政が廃されて共和政への道が拓かれた。アテネの民主政とローマの共和政は、ともに市民社会を実現するためのモデルを近代以降の世界に提示することになるが、両者のあいだには相違点もまた少なくない。両者の類似と相違がアテネとローマそれぞれの歴史的展開にどのような影響を与えることになったのか、下記のキーワードを参考にしながら(必ずしも、これらのすべてに言及する必要はない)350 字以内で論述しなさい。 元老院 民会 貴族(パトリキ) 陶片追放 市民権 執政官(コンスル) 帝政 抽選

類似点は、市民が武器を自弁して参加する重装歩兵が軍隊の中核となり、貴族に対する平民の参政権を拡大していった点である。相違点は、アテネでは陶片追放により僭主の出現を防止し、ペルシア戦争の結果、成年男性市民の参加する民会が国政の最高機関となり、官職も一部を除き抽選で選ばれるなど民主政がおおいに発展したが、ローマでは平民が執政官に就任できるようになったものの、帝政期に至るまで元老院が実質的な指導権を維持したことである。さらにアテネでは、ペリクレス時代に市民権の付与を両親がアテネ市民であるものに限定したため、都市国家の枠組みを超えられず、結局マケドニアに服属した。一方ローマでは、領土の拡大とともに市民権を開放し、212 年にはカラカラ帝によって全自由民に市民権を与えて、世界帝国となった。

○類似点では、重装歩兵による平民の身分的な上昇を指摘する。

○相違点では、民主政が発展したアテネに対し、元老院の力が強かったローマを、また、市民権を制限したアテネに対し、市民権の拡大によって世界帝国へと成長したローマをそれぞれ対比する。

古代ギリシアの代表的なポリスであるアテネ(アテナイ)は、紀元前6世紀末からの約1世紀間に独自の民主政を築き、発展させ、さらにその混乱をも経験した。このアテネ民主政の歴史的展開について、その要点を300字以内で説明せよ。句読点も字数に含めよ。説明に当たっては、以下の2つの語句を適切な箇所で必ず一度は用い、用いた語句には下線を付け。

民会

衆愚政治

[京都大学]

前6世紀末、クレステネスの改革により、血縁に基づく4部族制が地縁共同体に基礎を置く10部族制に改められ、五百人評議会が設置された。さらに僭主の出現を防ぐため陶片追放の制度も創設されて民主政の基礎が築かれた。その後、ペルシア戦争が起こると、三段櫂船の漕ぎ手として活躍した無産市民の発言力が強まり、前5世紀半ば頃ペリクレスの指導のもとで民主政が完成した。この結果、市民は貧富の別なく参政権を持ち、成年男性市民の全体集会である民会で、多数決により国家の政策を決定した。しかし、ペロポネソス戦争が起こり、ペリクレスが死去すると、民主政は煽動(扇動)政治家に指導される衆愚政治へと堕落することになった。

次の問について、400字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

395年のローマ帝国の東西分裂の後、4世紀末から8世紀前半までの時期を経て、ビザンツ(東ローマ)帝国は、小アジアとバルカン半島を主たる領土とした独自の世界を形成するに至る。その歴史的過程について、以下の語句を用いて説明しなさい。

イスラーム

ギリシア正教会

ササン朝ペルシア

スラヴ人

ユスティニアヌス

筑波大学

395年のローマ帝国の東西分裂後、西ローマ帝国は476年にゲルマン人傭兵隊長オドアケルにより消滅したが、東ローマ帝国は西方のゲルマン系諸国と東方のササン朝ペルシアに対抗して、その勢力を維持した。6世紀半ばには、ユスティニアヌス帝が、積極的に外征を重ねて地中海の覇権を確立し、かつてのローマ帝国の威信を一時的に回復した。しかし、その後、6世紀末から7世紀の初めにかけて、ササン朝とアラブ人によるイスラーム勢力によりシリア、エジプト、北アフリカなどが奪われ、ランゴバルト王国やフランク王国によりイタリアが失われ、バルカン半島にはスラヴ人やトルコ系ブルガール人が侵入して、帝国版図は小アジアとバルカン半島南部に限定された。これを受けて、7世紀以降、ビザンツ帝国は急速にギリシア化し、ギリシア正教会を影響下に置き、ギリシア語を公用語とする、ローマ帝国とは異なるギリシア的・東方的ビザンツ文化圏を形成した

次の問について、400字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

紀元前1世紀から紀元後376年までのローマとゲルマン人の関係について、以下の語句を用いて説明しなさい。

カエサル

軍人皇帝時代

『ゲルマニア』

東ゴート族

フン族

筑波大学

前1世紀におけるカエサルのガリア征服の結果、ローマとゲルマン人はライン川を挟んで恒常的接触を持つようになった。アウグストゥスは、国境防衛体制を整備し、ゲルマン人とも比較的平穏な関係を保つことに成功した。そして以後200年近くにわたって「ローマの平和」が続いた。しかし、この間にタキトゥスは、『ゲルマニア』を著し、質朴なゲルマン人の姿を描くことで、柔弱なローマ社会に警告を発した。この危惧が最初に現実化したのは、軍人皇帝時代であり、この時代にゲルマン人は、北方から激しくローマ帝国内に進出し、その安定を脅かした。軍人皇帝時代を收拾したディオクレティアヌスによっていったん帝国の安定は取り戻されたが、375年のフン族の西進によって東ゴート族がまずこれに服従し、続いて圧迫を受けた西ゴート族が翌376年にローマ領内に逃げ込んだことで、ゲルマン人の大移動が始まり、この動乱の中、西ローマ帝国は滅亡した。

ローマは、イタリア半島の小さな都市国家からその国の歴史を始めたが、次第に領土を拡大して、前1世紀後半にはついに地中海周辺地域のほとんどを領有する大国家となった。この過程で、ローマ国家は都市国家の体制から大きく変化した。前3世紀から前1世紀にかけて生じたローマ国家の軍隊と政治体制の最も重要な変化を、300字以内で説明せよ。解答にあたっては、下記の2つの語句を適切な箇所ですべて用い、用いた箇所には下線を施せ。また、句読点も字数に含めよ。

私兵

元老院

京大

重装歩兵として国防を担った平民は貴族に参政権を求めて身分闘争を展開し、ホルテンシウス法で法律上の平等を獲得したが、共和政期の政治は貴族と富裕な平民の一部が形成した新貴族により独占され、元老院の指導権も維持された。その後、ポエニ戦争などにより中小農民が没落し重装歩兵が弱体化すると、その再建を図ったグラックス兄弟の改革も失敗し、ローマは「内乱の1世紀」へ突入した。その最中、マリウスが無産市民の志願者を軍団に取り込む軍制改革を行い、軍隊は有力者の私兵となっていった。その後、ローマは三頭政治を経て、共和政の伝統を形式上尊重し、プリンケプスであるオクタウィアヌスが実権を掌握する元首政に移行した。

(別解)

共和政ローマでは貴族中心の元老院が大きな力を持っていた。中小農民を基盤とする重装歩兵の軍制は、半島統一後のカルタゴとのポエニ戦争後に崩れていった。それは長期の従軍によって中小農民が没落し、無産市民化したためであるが、これに対してグラックス兄弟が自作農の再建を試みたが失敗に終わった。以後の「内乱の1世紀」の過程で平民派のマリウスが無産市民を私兵とする軍政改革を行い、閥族派のスラと抗争した。その後の第一回三頭政治を経てカエサルが独裁権を獲得し、カエサル暗殺後の第二回三頭政治後、オクタウィアヌスが権力を握った。彼は元老院と共和政を尊重するという元首政を始めたが、実質上皇帝による帝政の始まりであった。

現代においてユダヤ人はパレスチナ地域だけではなく広く世界各地に離散した形態で生活している。しかし、このようなユダヤ人の離散状況(ディアスポラ)は近代に至って始まったわけではなく、既に古代において周辺諸国による政治的従属化が契機となって発生していた。キリスト教化の過程が比較的短期間の内に地中海世界の広範囲に渡って進捗したのも、それが主に、このような形で各地に散在していた会堂に集まったユダヤ人の改宗から始まったからである。では、紀元前十世紀初頭に成立したダビデ王朝以降、ユダヤの民はどの周辺民族の支配に甘んじ、どのような事件がきっかけとなって世界各地に離散していったのか。時系列に沿って離散を促した事件を指摘しつつ、ユダヤ人国家がローマ帝政期に至るまでに経験した対外的関係の変遷の概略を示しなさい。ただし、以下の語句を使い、最初に用いた箇所に下線を付すこと。

〔語句〕

アッシリア

アケメネス朝ペルシア

新バビロニア

南・北王国への分裂

マケドニア

ローマ

千葉大学

ダヴィデ、ソロモン両王の時代に繁栄した王国は、前10世紀末に南・北王国への分裂が起こり、北のイスラエル王国は前8世紀にアッシリアに滅ぼされた。南のユダ王国も前6世紀に新バビロニアに滅ぼされ、多くの人々が強制移住させられるという「バビロン捕囚」が起こった。前6世紀後半、アケメネス朝ペルシアが新バビロニアを滅ぼすとユダヤ人は解放され、帰国を許された。その後エルサレムにヤハウェの神殿を再興し、こうした受難の歴史の中でユダヤ教が確立されていった。前4世紀後半、マケドニアのアレクサンドロス大王が東方遠征を行いアケメネス朝ペルシアを滅ぼした結果、マケドニアに支配されるところとなったが、大王の死後帝国は分裂し、セレウコス朝シリアがパレスチナの地を支配するようになった。前2世紀中頃ユダヤ人の王朝としてハスモン朝が独立するが、前1世紀中頃にローマに滅ぼされ、ローマの属州となった。エルサレムの神殿を中心にユダヤ教を信奉していたユダヤ人たちは、ローマ帝国による属州支配に対して2度にわたる大規模な反乱(ユダヤ戦争)を起こした。しかしローマ帝国によって鎮圧され、神殿は破壊されてユダヤ人は立ち入りを禁止され、故地を追われて各地に散らばるという離散状況となっていった。

十字軍の運動が始まる頃には、西ヨーロッパ世界はローマ＝カトリック教会の下で統合され、独自の文明として自己を主張し始めたように見える。だがキリスト教会は古代ローマの時代から着々とその組織づくりをおこなってきた。このキリスト教会の動きに注目しながら、十字軍が開始されるまでの西ヨーロッパ世界の形成について、以下の語句を用いて、400 字以内で説明しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

イスラーム教徒 クローヴィス 聖像禁止令 ニケーア公会議 800 年

筑波大学

ローマ皇帝コンスタンティヌスはミラノ勅令でキリスト教を公認し、ニケーア公会議を主宰して教義を統一し、アタナシウス派を正統、アリウス派を異端とした。その後ローマ帝国が東西に分裂し、ゲルマン人の大移動によって西ローマ帝国が滅びると、西方世界の統一はキリスト教会に託されることになった。フランク族のクローヴィスは正統のアタナシウス派に改宗したことにより、教会と親密な関係を持つことができた。さらに宮宰カール＝マルテルはピレネーを越えて進出してきたイスラーム教徒をトゥール・ポワティエ間の戦いで撃破してキリスト教を守った。西暦 800 年、ローマ教皇レオ3世はカロリング朝のカールに帝冠を与え、西ローマ帝国を復活させた。かくして東ローマ帝国の支配から自由になったローマ＝カトリック教会は聖像禁止令をめぐるビザンツ皇帝との論争に終止符を打ち、ギリシア正教会と別れて独自の道を歩き始めた。

次の問について、400 字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

現代のドイツ領土は、かつての神聖ローマ帝国を基盤としている。神聖ローマ帝国の名称の由来、その 15 世紀末までの変遷について、以下の語句を用いて説明しなさい。

オットー1世 金印勅書 皇帝による統一 領邦 イタリア政策

筑波大学

ローマ帝国の復興をめざした東フランク[ドイツ]王のオットー1世は、北イタリアに出兵して教皇を援助し、962 年に教皇から帝冠を授けられた。ドイツ王が皇帝の称号を受け継ぐことになったことが、神聖ローマ帝国の起源である。その後の皇帝はイタリア政策に力をそそいで、本国の統治をおろそかにしたため、諸侯の自立の傾向が強く、皇帝による統一が達成されなかった。13 世紀には皇帝不在の大空位時代もあり、カール4世の時代の 1356 年に金印勅書が出されて、聖俗の7諸侯が選帝侯として皇帝を選出することが定められた。15 世紀半ばからはハプスブルク家から皇帝が選出されたが、混乱は收拾されず、諸侯や都市など、300 あまりの領邦が分立した。

次の問について、400 字以内で解答しなさい。なお、解答文の中では指定された語句に下線を施すこと。

西ローマ帝国滅亡後から8世紀後半までのイタリアの政治情勢について以下の語句を用いて述べなさい
(なお、以下の語句のうちランゴバルドはロンバルドと表記される場合もある)。

ピピン ランゴバルド 東ゴート ユスティニアヌス カール大帝

筑波大学

西ローマ帝国滅亡後、イタリアを支配したのはオドアケルであったが、やがて 493 年、テオドリック率いる東ゴート族がイタリアに侵入、これを破り、東ゴート王国を建てた。東ゴート王国時代にイタリアは一時安定を享受したが、間もなく東ローマ皇帝ユスティニアヌスの遠征を受け、東ゴート王国は 555 年に滅亡した。しかしながら、東ローマ帝国のイタリア支配も長くは続かず、ユスティニアヌスの死後、ゲルマン人の一派ランゴバルド人がイタリアに侵入、東ローマ帝国のイタリア領の大半を奪って、ランゴバルド王国を建設した。8世紀の半ばになると、ランゴバルド王国に脅かされた教皇の要請を受け、フランク王国がイタリアに介入するようになる。ピピンはイタリア遠征を行い、その領土の一部を奪い、ラヴェンナ地方を教皇に寄進した。最終的にカール大帝が 774 年にランゴバルド王国を倒し、イタリアの大部分をフランク王国に併合した。

現在、ヨーロッパと呼ばれている地域の周辺部で展開した歴史について、以下の問いに答えなさい。

9～10 世紀以降ローマ＝カトリック圏に侵入したノルマン人やマジャール人は、10 世紀後半以降ローマ＝カトリックを受け入れ、その重要な構成員となった。これによりローマ＝カトリック圏は拡大した。以上の過程について、彼らによる国家形成にも触れながら説明しなさい。なお、次の語句を必ず用い、それらの語句には全て傍線を引くこと(250 字程度)。

ハンガリー

ノルマンディー

スカンディナヴィア

イングランド

大阪大学

スカンディナヴィア半島周辺を原住地とするノルマン人は、デンマーク・ノルウェー・スウェーデンなどの王国を建国する一方、ヨーロッパ各地に海上遠征を繰り返した。その一派の口は北フランスにノルマンディー公国を建て、カトリックに改宗した。その後ノルマンディー公ウィリアムがイングランドにノルマン朝を、ルッジェーロ 2 世が南イタリアに両シチリア王国を建国した。一方、東方からはウラル系のマジャール人が侵入し、オットー 1 世に西進を阻止されハンガリーに定住し王国を建て、カトリックに改宗した。

中世初期のノルマン人の活動とその影響について論述せよ。なお、論述するにあたっては、下の語句をすべて使用し、使用した箇所には下線を引いておくこと。

カヌートシチリア

封建制度

ルーシ

口口

京都府立大学

航海技術を持ち、商業や海賊行為を行ったノルマン人(ヴァイキング)はヨーロッパ各地に進出し建国した。911 年口口は北フランスにノルマンディー公国を、ルーリックの率いる一派ルーシ 9 世紀にロシアにノヴゴロド国を、ついでキエフ公国を建てた。地中海に進出した一派は 12 世紀にはシチリア島をイスラーム勢力から奪い、南イタリアとあわせて両シチリア王国を建てた。またノルマンの一派デーン人はアングロ＝サクソン王国のイングランドに侵入したが、9 世紀末のアルフレッド大王はこれを撃退した。しかし、1016 年にはカヌートがイングランドを一時征服した。西ヨーロッパではイスラーム勢力の侵入に加え、フランク王国が分裂したところからこのノルマン人やマジャール人の侵入を受けた。こうした外敵の侵入から守るために、封土を媒介として軍役義務を課す主従関係が成立した。この主従関係を封建制度という。

12 世紀に至る聖職叙任権闘争について 400 字以内で論述せよ。なお、論述するにあたっては、下の語句をすべて使用し、使用した箇所には下線を引いておくこと。

1122 年

カノッサ

クリュニー

妻帯

ハインリヒ 4 世

京都府立大

カロリング朝以降、ゲルマン人の皇帝や国王が聖職叙任権を持っており、とくに神聖ローマ皇帝は、これを統治の支柱としたが、皇帝の都合によって聖職者にふさわしくない人物が任命されることが多かった。これに対して 10 世紀以降にクリュニー修道院などで協会刷新運動が始まると、これは教会全体の改革へと発展した。教皇グレゴリウス 7 世は聖職売買や妻帯を禁止し、改革を進めることで教皇権の拡大をはかった。さらに教会腐敗の原因が皇帝や国王など俗人による聖職者の叙任であるとして禁止した。この決定は帝国の統治を揺るがすものであったため、当時の皇帝ハインリヒ 4 世との間で叙任権闘争を引き起こした。教皇が皇帝を破門すると、ドイツ諸侯の皇帝への離反が起きたため、ハインリヒは 1077 年カノッサで教皇に謝罪した。この闘争は 1122 年にウォルムス協約で妥協が図られ、カトリック圏の全ての聖職叙任権は教皇にあるとされ、帝国教会政策は挫折した。